

学 位 論 文 の 要 旨

三 重 大 学

所 属	三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻（博士後期課程） 看護学領域 母子看護学分野	氏 名	松本 宙 ^{まつもと ひろ}
<p>主論文の題名</p> <p>思春期にある子どもの1型糖尿病管理に関する研究 Type 1 diabetes management in adolescents.</p> <p>主論文の要旨</p> <p>1. 背景</p> <p>1型糖尿病を根治する方法はまだ確立されておらず、生涯にわたってこの疾患と共にする必要がある。近年、1型糖尿病のように小児期発症の慢性疾患を有する患者が、小児期医療から成人期医療への移り変わりである移行、および、移行期支援の重要性が高まっている。とりわけ、1型糖尿病管理において思春期は、主体者が保護者から子どもへと移り変わる時期で、管理面においても大人になる準備が必要である。このような特徴を踏まえて、海外においては、親子双方の視点から1型糖尿病管理の状況について把握が行われているものの、わが国においては、この時期の管理状況は十分に明らかにされておらず、親子双方の視点から管理状況について把握を行った研究は極めて少ない。</p> <p>2. 目的</p> <p>思春期における1型糖尿病管理の状況を親子双方の視点から明らかにし、包括的な移行期支援を検討する。</p> <p>3. 方法</p> <p>第1研究では、DFRQ（Diabetes Family Responsibility Questionnaire）日本語版を作成し、12～18歳（中学1年生～高校3年生）の1型糖尿病の子どもとその保護者を対象に信頼性と妥当性の検証を行った。第2研究では、12～18歳（中学1年生～高校3年生）の1型糖尿病の子どもとその保護者を対象に半構造化面接を用いて情報を収集し、質的に分析を行った。第3研究では、国内の医療機関に通院ならびに患者会に所属する10～18歳（小学4年生～高校3年生）の1型糖尿病の子どもとその保護者を対象に質問紙調査を実施した。第1研究から第3研究のすべての研究は、所属機関の倫理委員会の承認あるいは許可を得て実施した。</p>			

4. 結果

DFRQ日本語版を作成した第1研究では、有効回答31組を分析した。Cronbach's alphaは、子ども評価 $\alpha=0.784$ 、保護者評価 $\alpha=0.687$ であった。既知集団妥当性の検証において、子ども評価のDFRQでは、子どもの年齢との間で負の相関が有意に認められた ($r=-0.397$, $p=0.027$)。その一方で、保護者評価のDFRQでは、子どもの年齢との負の相関が示されたものの、有意には認められなかった ($r=-0.311$, $p=0.089$)。収束的妥当性の検証において、子ども評価および保護者評価のDFRQと糖尿病自己管理行動に対する自己効力感尺度との間で負の相関が有意に認められた (子ども評価 $r=-0.390$, $p=0.030$; 保護者評価 $r=-0.478$, $p=0.006$)。

半構造化面接を用いた第2研究では、子ども8名と保護者9名の合計17名から得たデータを収集し、分析を行った。その結果、親子の認識として、自己管理が進む思春期において、子どもは管理に対して試行錯誤していた一方で、保護者は管理に懸念を抱いていることが明らかになった。また、1型糖尿病管理の一部では保護者に依存している状況が見られ、十分なスキルを持たない管理においては保護者の関与が継続的に行われていた。さらに、子どもの将来に対して、子ども自身は具体的な認識を持っていなかった一方で、保護者は1型糖尿病に関連した具体的な懸念を抱いていた。

DFRQ日本語版を用いた第3研究では、有効回答103組を対象に分析を行った。子ども評価のDFRQならびに保護者評価のDFRQにおいて、保護者評価のDFRQの中学生・高校生間を除く、各就学段階間で有意差が認められた。これにより、1型糖尿病管理責任は就学段階の移り変わりに伴い、子ども側が担うようになることが示された。また、DFRQ合計得点のみならず一部の項目において、1型糖尿病管理責任に対する親子の認識の相違も明らかになった。さらに、重回帰分析の結果、1型糖尿病管理責任に関連する心理・社会的因子として、年齢 ($\beta=-0.54$, $t=-7.17$, $p<0.001$)、糖尿病自己管理行動に対する自己効力感 ($\beta=-0.32$, $t=-4.00$, $p<0.001$)、社会的支援と仲間 ($\beta=0.30$, $t=3.65$, $p<0.001$)、身体的幸福感 ($\beta=-0.20$, $t=-2.28$, $p=0.025$)、性別 (男性=0, 女性=1) ($\beta=-0.18$, $t=-2.54$, $p=0.013$) が導き出された (調整済み $R^2=0.55$)。

5. 考察

第1研究の結果から、DFRQ日本語版の信頼性と妥当性が実証された。また、DFRQ日本語版を用いた第3研究の結果から、1型糖尿病管理責任の移り変わりの状況、ならびに、親子の認識の相違および関連する心理・社会的因子が明らかになった。これらに加えて、半構造化面接を用いた第2研究の結果から、思春期においては、基本的に子どもが主体者となって1型糖尿病管理を行っていた一方で、保護者は子どもの管理に対して懸念を有していることが明らかになった。さらに、保護者はこの時期の管理に関与しづらくなることだけではなく、思春期特有の血糖コントロールの難しさによって1型糖尿病管理に対する保護者の懸念を増大させていた。将来に対しては、子どもは具体的な認識ができていなかった一方で、保護者は具体的な懸念を示していた。これらの結果を踏まえて、1型糖尿病の移行期支援においては、成長発達、自己効力感、家族、将来の視点を踏まえた支援の必要性が示唆された。